

デイケンズ・公開朗読の一背景

梅宮創造

デイケンズにとって一八五八年は怒濤の年であった。その後の人生にも、作品にも、ただならぬ大きな意味を与えた一年であった。

一八五八年六月四日、デイケンズの妻キャサリンは夫婦離別の調停書に署名し、一週間遅れてデイケンズもまた同書に署名した。これまでの二二年間、キャサリンはデイケンズの子を十人まで産み（二人夭折）、デイケンズが夢みた炉端のにぎわいを現実のものにして、彼の生活と文学を二つながら豊かに実らせてきた。それやこれやが今、あえなく崩れ果てたのである。いったい何が起きたのか。

このひと月ばかり、身边にはけしからぬ噂が飛びかっていた。永年デイケンズ家に起居し、その家政を助けてきたジョージナ——キャサリンよりも十一歳年少の妹と、他でもないデイケンズとの関係が怪しまれたのである。そればかりではない。デイケンズはさる若い女優にのぼせあがって女房の嫉妬と疑惑をかったとか。噂の出所は、デイケンズの確信するところ、キャサリンの母親と末の妹による「悪意」からということ、デイケンズとしてはこの二人を怒

すわけにいかなかった。そこで異例にも、そして火に油を注ぐ愚として友人らが諫めたにもかかわらず、デイケンズは『ハウスホールド・ワーズ』の誌面に私的な声明文を載せたのである。実はそれより数日先んじて『タイムズ』紙および他紙に同文が載り、たちまち世間を騒がせる結果となった。デイケンズの憤りは鎮まる気配すらなかった。

「私儀、長く引きずってきた家庭のある問題が、最近やつと解決をみました。これは侵すべからざる個人的な一件でありますから、あからさまに申し上げるよりも、ただそつとしておいていただきたいのです。とにかく、怒りも悪感情もまったくくない調停が実現したのです。…しかしどういうわけか、この件について、まったくでたらめな、聞くに耐えない、残酷至極の誤解がなされている。それには私ばかりでなく、私に掛け替えない純情な人たちが、そして何処かの罪なき人びとまでが巻き込まれているのです。…私の名と妻の名にかけて、ここにはつきりと宣言しておきたい。先にふれた問題

のことで近ごろ巷にささやかれている噂は、すべて忌まわしい虚偽であります。〔一〕

声明文の骨子のみを引用すればこうだが、ここでは「虚偽」の内容が明示されておらず、いたずらに一般読者の好奇心を煽るような文面になっている。それからもう一つ、公開朗読のマネージャー、アーサー・スミスに宛てたデイケンズの手紙がある。夫婦離別に至った一件から始めて、「悪意たつぷりの二人」をとり上げ、「彼らは、この別居のことと、私がすこぶる愛着をいただき、好意を寄せている若い女性の名前とを結びつけるのだ。：誓つていうけれど、この地上に、その若い婦人にもまさる美德をもち、みじんの欠点もない女性はいない。彼女は無垢で、純潔で、私の娘たちと変らずに善良なのだ」とデイケンズは弁じている。この手紙には、「悪意たつぷりの二人」たるホガース夫人（キャサリンの母）と娘ヘレンが署名した事実無根の証言までが添付されていて、デイケンズの怒りのほども察せられるというものである。

二つの文面からうかがえるのは、どこまでも自己の正当を訴えずにはおれぬデイケンズの潔癖な性分と、それから世間体を気にするあまり、家庭内の荒れ模様を押し隠そうとするデイケンズの「虚偽」である。実際、夫婦離別の悩ましい一件が、かくも冷静に穩便に、相互の理解をもって終息したはずはない。上記の手紙にはフォスターの名もジョージナの名も見え、また子供たちのことにも言及されているが、その頃、当事者のキャサリンは自宅を離れてブライ

トンの地に身を遠ざけていたほどなのである。

デイケンズとキャサリンの不和は、ずっと早くから、とらえようによっては結婚の初期からすでに小さな芽を出していたとも考えられる。デイケンズはバーデット・クーツ女史に宛てた手紙（一八五八年五月九日）で、「私たちの結婚は何年も前から、他に例をみないほど不幸なものでした」と語り、「共通の興味も理解も、二人だけの秘密も思惑も、はたまた互いのやさしい共感などもありえないような夫婦、そんな一組の男女こそ妻と私なのです」と打ち明けている。デイケンズはきわめて謙虚に、ここに至った顛末を自分の非であるとまで述べているが、それはもちろん、クーツ女史とキャサリンが親密な関係にあることを知っていたからにちがいない。またフォスターに宛てて（一八五七年九月五日）、「遺憾ながら、キャサリンと小生とは気が合わず」と洩らし、「二人のあいだの絆を保つには、われわれは不思議なほどソリが合わない」と、ここでも妻だけを責めるようなことはしない。「彼女が、小生のような性質ではない男と結婚していたら、ずっと幸せになれただろうに」とまでやさしく出て、「どんなことがあつても、彼女が小生を理解するようにはならんだろうし、二人が打ち解けることもないだろう」と万策尽きた口ぶりなのである。アーサー・スミスに宛てた先の手紙でも、「性格や気質のすべての面で、不思議なくらいソリが合わない」、あるいは「二人とも悪意をもっているわけじゃないのに、こうも理解し合うことがなく、：」と大同小異の述懐がくり返されている。こ

のあたりは少々踏みこんで検討したほうがよさそうだ。

キャサリンへの愛情が、結婚当初から欠けていたというまい。

婚約から結婚、それに続く数年間のデイケンズ書翰を見れば、愛情に裏打ちされた若い二人の鼓動がひしひしと伝わってくる。しかしそのかたわら、いつも何か激しく燃える別の感情がデイケンズの胸内を駆けめぐっていたようだ。一所に永くとどまれぬ定めなき心、不安、満足しえない感情——これらをやさしく包み込んでくれる女性としては、実際キャサリンは役不足であったものか。ここでふたたびデイケンズの言葉を拾ってみよう。デイケンズは己の性質をよく知っていたようである。「小生の側にも至らぬ点がいっぱいある。

…二転三転する考え、気まぐれ、気むずかしいところなど、数かぎりなくある」(一八五七年九月五日、フォスター宛)、「私には激情しやすいところが多々あります。どうやら激しい生き方と、夢みがちな一面が原因しているのでしょう。けれども私は忍耐がよく、あたたかい心の持主なのであります」(一八五八年五月九日、クーツ女史宛)。「キャサリンが小生を不愉快にし、不幸にするばかりか、小生もまた彼女を同様に行っているのだ。いや、こっちの罪のほうが、ずっと大きいのではないか」(一八五七年九月三日、フォスター宛)。

後年、デイケンズの息子や娘たちが父親の思い出をそれぞれに語っているが、それらを総合すれば、おおむね右のデイケンズ本人の評価にも通じるようである。やさしくて思いやりのある父、厳格で几帳面で妥協をゆるさぬ父、猛烈に突っ走る父、とにかく、こん

なデイケンズは実に誤解されやすい人であった。とりわけ女性との関係にあつては、ときとして裡にひそむ複雑な感情が、激しい愛と憎しみが、本人でさえ抑えようもなく噴出した。善と悪の二面が、魔神と美神とが、嵐の勢いで駆けめぐった。⁽⁴⁾

次女のケイト・ベルギーニーにいわせるなら、「父はマライア・ピードネルと、あるいはエレン・ターナンと結婚しようが、結果はみな同じだったでしょう。だって、女というものを理解できなかった人ですから」⁽⁵⁾となる。ケイトの評は辛辣にひびくものの、デイケンズ的工作中における女性像なるものを理解する上で、これは奇しくも一つの大きなヒントを投げかけてくれるのではないか。デイケンズはなぜ、あままで理想の極致を象ったような、いささか現実味の乏しい若い女性を次から次へ登場させたのか。日夜そういうタイプの女性を切に求めていたからに他なるまい。それはむろん、現実には求むべくもない対象であり、少なくともキャサリンはどう転んでも、その種の女性ではなかった。かくてデイケンズの気持は、キャサリンからみるみる遠ざかっていった。

一八五七年の夏、もはや妻と寝食を共にせずとやら、デイケンズは使用人に命じて寝室と隣の部屋の境を戸でふさがせた。キャサリンを寝室へ追いやり、自分は隣室に寝起きして別々の生活形態を確立した。キャサリンとしては、これを侮辱と思わなかったはずはない。それに前後して、若い女優のエレン・ターナンに贈るつもりでブレスレットが誤って妻のもとへ届けられた。ここでまた一悶着が

あつたわけだが、それやこれや、デイケンズとしては思いのままに振舞いながら、妻の神経をどれだけ傷めつけたことか。ケイト・ペルギーは往時を回想して、こう語っている。「母が家を出て行ったとき、父はまるで狂人でした。最悪の事態が、父の最大の短所が一どきにあられ出たようでした。父は私たち子供のことなど、これっぽちも気にかけてくれなかったの。あの時期ほどわが家が暗くて、不幸なときはなかったわ」⁽⁶⁾ 事実、一家の不幸は、キャサリンが

家を出る前年のクリスマスにはもう誰の目にも明らかであった。例年の陽気なお祭り気分はどこへやら、「パーティーもなく、晩餐会もなく、続くべき十二夜の素人芝居だって計画されない」⁽⁷⁾ これはどう見てもデイケンズが描くクリスマスではなく、デイケンズが希う家庭の姿でもない。そんな状態が続いた。デイケンズはウィルキー・コリンズに泣きごとをこぼしている。「仕事にもならなきゃ、休息もできやしない。一ときの平安も、喜びもないんだ。『凍れる海』の最後の晩以来ずっとだよ」(一八五八年三月二一日)。

『凍れる海』のマンチエスター公演は前年の八月だから、あれから半年あまりが経っている。この間に事態が急変したようだ。「激しい生き方と、夢みがちな一面」をもつデイケンズの目に、キャサリンの重苦しい中年太りの容姿はいかにも我慢ならぬものだったろう。夫婦といい、親子といい、家庭といい、この直近の人間結合が、このときほどデイケンズの目に疎ましく映ったときはなかったのではないか。こうして夫婦は、二二年間におよぶ苦楽のかずかずを忘

却の淵に沈めて離別したのである。キャサリンは成人した長男のチャリーといっしょにロンドンの寓居に住み、ほかの子供らはみな父親の権限のもとにギヤズヒルの自邸にとどめ置かれた。その家には、ここ十数年来、家事の切り盛りや育児に奉仕してきたジョージナが、妻キャサリンのあの妹がそのままとどまった。

ジョージナとデイケンズ一家との縁は深い。一八四二年にデイケンズ夫妻がアメリカへ渡って留守の折、ジョージナは子供たちの遊び相手を務め、半年後に夫妻が帰国するなり、以後ずっと一家にまじって生活を共にした。聡明かつ機転の利くところが際立ち、かたや主婦たるキャサリンの存在がどこか霞むようであった。そんなジョージナをデイケンズが一層もちあげ、誰よりも篤い信頼を置いたから、さすがのキャサリンも、そうそう鈍感ではいらなかった。

かつて結婚当初にあつては、キャサリンのすぐ下の妹メアリが似たような位置関係にあつたものである。メアリは結婚したばかりの姉を助けるため、デイケンズの新婚家庭に入り込んだ。そのメアリが、デイケンズの目に完全無欠の天使と見えたわけだが、それを妻はどう思ったものか。メアリが十七歳で急死してからというもの、デイケンズの悲しみはやる方なく、異常ともとれるメアリ思慕のくさくさがいつまでも尾を引いた。これまた、妻はどう思ったものか。フォスターへの手紙(一八五七年九月三日)でデイケンズは、キャサリンとの齟齬は長女が生れた頃から感じていたと打ち明けている。

長女はメアリ・ホガースの死後ちょうど十ヶ月後に生れ、デイケンズはこの子にメアリと名づけたのであった。

アーサー・A・エイドリアンの説によれば、メアリ・ホガース亡きあとデイケンズの心の空隙を埋めたのが、妹ジョージナであったという。どこかメアリの美質を写したジョージナが、ほぼ当時のメアリの年ごろになって、今しもデイケンズの前に現れたというべきか。しかしメアリやら、ジョージナやら、妹のほうが気に入られてしまうという、そんな姉たる妻の心内は如何であつたらうか。ともすると妻とび越え、妹のほうへ気持が動いてしまうデイケンズにとって、結婚とはそもそも何であつたか。エイドリアンはこう指摘する。「結婚の初年にして、第三者を介在させなければ家庭の幸福を全うできぬという、もしそれが本当なら、デイケンズの結婚そのものに、何か欠陥があつたことにならう」⁽⁸⁾欠陥——確かにそのとおりである。

マライア・ビードネルの一件にしても、デイケンズの同種の傾向を露呈しているではないか。彼女もまた、かつてデイケンズ青年にとつては手の届かぬ天使であつた。しかしマライアは死ぬかわりに醜い肥満の中年女性ウィンター夫人となつて、有名作家デイケンズの前にふたたび姿を現した。一瞬、過去の甘い幻がよみがえつたかと思われたが、むろんそんなはずはない。デイケンズはいたく失望した。なぜ、そんなふうになつてしまうのか。どうかすると現実にならないものを求め、それを求めすぎるあまり、かえつて欠乏感を募ら

せてしまっているからにちがいない。

エレン・ターナンについてはどうだろう。この十八歳の天使には、ウイルキー・コリンズ作『凍れる海』の素人芝居が縁で知合うことになる。イギリス内外でならしたターナン夫人（ファニー・ジャーマン）と、その娘二人の共演をもつて芝居は大いに観客を沸かせたが、娘の一人がエレンであつた。そのエレンに、親子ほども齢のひらきがあるデイケンズがひと目惚れしたから、話は厄介になる。デイケンズはエレンとの交際を家族に隠そうともしなかつたが、キャサリンとしては不愉快を覚えなかつたはずはない。エレンの出現が、すでに冷えきつたデイケンズ夫妻の関係をさらに悪化させ、とうとう破局をむかえる一因となつたことは否めない。しかし公にエレンの名は、五八年八月の「不法に公表された手紙」にも、『ハウスホールド・ワーズ』誌巻頭の「声明文」にも一度たりとて現れない。デイケンズの死後三年にして出版されたフォスターの『伝記』にも、八五年に娘のメイミーが請われて書き綴つた『長女によるチャールズ・デイケンズ伝』にも、エレンは姿を見せない。もちろん身辺の者は実情を知つていたのである。それでいて彼女の存在を大っぴらに示すことは、デイケンズの文名を、いや人間デイケンズそのものまでも危険にさらす暴挙であると考えられた。それなのに、なぜ、デイケンズの遺言書がフォスターの『伝記』巻末に堂々と掲げられ、遺言書の先頭にはエレン・ターナンの名が明記され、しかも一〇〇〇ポンドの大金⁽⁹⁾までも贈与される旨が記されているのか。

それについて関係者一同が口をつぐんできたというのも解せない話である。エレンはいかにも謎の女というほかない。

エレン・ターナンはデイケンズ亡きあとしばらく世間の目を逃れるように身を隠し、どこまでも「影の女」として生きるが、六年が過ぎた頃には、牧師あがりの学校教師ジョージ・ロビンソンと結婚して「表の女」に転ずるのである。十歳も年齢を偽り、デイケンズとの過去をきれいに清算する思いで新生活に踏みきった。子供も二人生れた。ケント州は海辺の町マーゲイトに住み、土地の空気にも馴れ、人びとに慕われながら幸せな日々を送ったようだ。ピーター・アクロイドによれば、エレンはかつてデイケンズに朗読の発声法を助言していたらしいが、¹⁰マーゲイトにあっても、ときどき地域の人びとを集めて朗読会を開いた。しかもなんと、デイケンズの作品を実に巧みに読んで聴かせたのである。

アクロイドの他にもキャサリン・M・ロングレイが、エレンによる朗読指導の一件に着目し、その詳細を論文に発表している。ロングレイはまず、デイケンズの声も発声法も朗読むきではない事実を強調したあと、その弱点を改善するためにデイケンズが特段の訓練を行っていたことに及んでいる。女優のエレンを折々訪ねては彼女の指導を仰いでいた、とロングレイは判断するのだ。こうなると、デイケンズとエレン・ターナンとの深い仲なども、いわゆる世間一般の男女関係の枠内に収めきれなくなるわけで、もっと広い視点から捉え直さねばならない。「ターナン一家を醜聞から守らなくても

いいと仮にデイケンズが考えたとしても、朗読訓練と彼らとの関係だけは世間に知られたくなかっただろう。プライドがあったから。《燃えるようなプライド》こそ、デイケンズの御しがたい罪悪であった¹¹」アメリカ朗読巡業の折にも、デイケンズは暗号を使って執拗なまでにエレンをアメリカへ呼び寄せようとした。体調不良が続く、声も思うようにならなかったぐらいだから、よけい助言者を求めているとも考えられる。それが真実なら、このときのエレン執着はただエレンが恋しくてたまらぬというばかりではなかったとも取れる。どこまでも真意を隠そうとするのは、やはりプライドゆえか。

ある日のこと、マーゲイトの牧師ベナムに、エレンはわが夫にも秘めておいた過去の一事を告白した。ところが後年ベナムはそれを友人のトマス・ライトに洩らしてしまった。ライトは伝記作家であるが、くだんの秘密を胸内にとどめおき、いよいよ老齢におよんだところで一書を著した。これが物議をかもしたトマス・ライトの『チャールズ・デイケンズ伝』(一九三五年)¹²である。エレン・ターナン没後二十年、デイケンズ逝つてすでに四十有余年が過ぎていた。トマス・ライトは『凍れる海』に出演したエレンのこと、「不法に公表された手紙」にある「若い女性」がエレンであることを、少しのためらいもなく断言している。またデイケンズが『二都物語』を執筆する頃には、エレンへの愛もますます深まり、さればこそ作中のルーシー・マネットはすなわちエレンなのだ断じている。「まだ十七歳ぐらいの若い娘が、乗馬服に身をつつみ、いつまでも麦わ

らの旅行帽子の紐なぞにぎっている。小さな、ほっそりとした、かわいらしい姿、豊かな金色の髪、その青い目がもの問いたげにこっちを見る。眉をつり上げたり、ひそめたりしながら、困惑とも、驚きとも、警戒とも、また何やら楽しげに凝視しているともつかぬ、それらを全部合わせたような不思議な表情のおでこ：」⁽¹³⁾ 事実ディケレンズは、ルーシーの外貌をはじめで紹介するこの場面の校正刷りをエレンのもとに届けさせている。どこまで生き写しかわからないが、このとき少なからずディケレンズの意識のなかにエレンの面影が揺らめいていたことだけは推察に難くない。エレンの姪にあたるヘレン・フローレンス・ウィツカムが語るには、先のルーシー描写はまさしくエレンその人だという。「あの何ともいえない、固い、張りつめたような表情は、それこそ伯母の特徴でした。きっとルーシーみたいな人だったのでしょね。ときどき、とつても真剣な目でじっと見つめたものです」⁽¹⁴⁾

ともあれ、ライトの『伝記』には処々に独断の影がちらつき、たとえばチャールズ・ダーニーはそのままチャールズ・ディケレンズだとか、ピップに対するエステラの態度こそディケレンズに対するエレンの態度にちがいないとか、エレンは「ディケレンズの名声と富にのぼせて、かずかずの贈物に喜んだものの、ディケレンズを愛してなぞいなかった」⁽¹⁵⁾とまで断言している。そうまでいい切つて良いのだろうか。

そこへいくと、さらに四年後に公刊されたグラデイス・ストー

リーによる『ディケレンズと娘』は、日常生活における実感を裏づけとして、甚だ説得力に富む一書といえよう。⁽¹⁶⁾ これはケイト・ペルギーが在りし日のディケレンズの周辺を回想してグラデイス・ストーリーに語り伝えた事がらを軸にしている。「小柄で金髪の、まあ、ちよつとかわいらしい女優が、若いというだけで特別の魅力もないエレン・ローレス・ターナン嬢が、仕事ずくめのディケレンズの日々に春の息吹を運んできたってわけ——そうして、彼を虜にしまったの。：父は世界を制覇した人でしょう。相手は十八の娘で、父に見初められたことばーつとなり、得意にもなったのよ」⁽¹⁷⁾「父は善良な人じゃなかった。でも決して放埒な人ではなく、まあ、驚異の人なのよ。父はこの娘さんに首ったけだったけど、彼女を責めるわけにもいかなかったわ。——だって、一人だけのせいにはできないもの」⁽¹⁸⁾

ペルギー夫人はこんなふうに着せ、思うがままに語っているのだが、やはり瞠目すべきは、ディケレンズとエレンとのあいだに子供が誕生(夭折)していたという一件だろう。この証言は諸方に波紋を呼び、以後の伝記作家やディケレンズ研究家の関心を煽り、エドモンド・ウィルソンから最近のクレア・トマリンに至るまで、さまざまに取りあげられ論究されている。

『ディケレンズと娘』を著すにあたって、グラデイス・ストーリーはディケレンズ関係の資料を漁り、ファイルやノートをつくつた。一九七八年の死後にそれらが発見され、ディケレンズ・ハウス博物館に

寄贈されたが、デヴィッド・パーカーとマイケル・スレイターがそれに関する興味ぶかい紹介文を『デイケンジアン』に寄せている。

発見されたこの書類には、ペルギニー夫人が語った内容のうち『デイケンズと娘』に含めなかったものがあるという。娘のケイトが別居の母をときどき訪ねるからという理由で、デイケンズは二年ばかり娘と口を利かなかったそうだ。その二年が経つ頃に、ケイトは好きでもないチャールズ・コリンズのもとへ嫁ぐわけで、その事実と重ねて考えてみると意味ぶかいものが感じられる。あるいはまた、夫婦喧嘩をするたびに、ジョージナとフォスターは夫婦間の誤解を解消しようとするよりも、かえって問題を錯綜させてしまったとやら。これなどは身近にいた者だけが感知することだろう。それから胸の痛む話がある。一九二八年九月八日に、エレン・ターナンの息子のジェオフリがデイケンズの息子のサー・ヘンリーを訪ねて、「私の母はあなたの父上の情婦だったのでしょか」と訊いてきた。サー・ヘンリーの返答が、「残念ながら、そのとおりです」というものであった。それからジョージナはオーガスタス・エツグばかりでなく、ジョン・フォスターからも求婚され、どちらも断つたことなど、いずれもグラデイスのノートによって初めて知られる事実である¹⁹。

エイダ・ニズベット著『デイケンズとエレン・ターナン』を見ると、その当時から「へうるわしの若き女優」とデイケンズとを結びつける風評がかまびすしかった事実に変更されて驚かされる。さぞデイケ

ンズも、心休まる時がなかったことだろう。しかし風評とか憶測の域を越えて、未公開の手紙やその他のおびただしい書類に目を通し、デイケンズとエレンとの関係に迫ったニズベットの論考はやはり注目してよい。とりわけ第四章に展開するデイケンズ書翰の謎の解明ともなれば、一読興奮を禁じえないのである。

キャサリンとの離別に関しても、デイケンズの一面をえぐるような鋭いエピソードがここに紹介される。キャサリンの親友サー・ウィリアム・ハードマンの所感に、こんなものがあつたそうだ。「手紙にせよ何にせよ、息子（アーサー）の非業の死について妻には一切報せなかつたという、それゆえに夫人の悲しみはいや増すばかりであつた。私のデイケンズ評価が最低にまで落ちるのは、この一件をもつてすれば足りる。彼の罪悪も、ここに極まれりというべきか。作家としては彼を尊敬するものの、人間としてはこの男を軽蔑する²⁰」またジョン・ピジロウの『激しき生涯の思い出』から、ニズベットは次のような一節を引いている。「デイケンズの作品のうち何が最高傑作かについては意見が大きく分かれよう。しかし思うに、英語圏の人びとであれば、デイケンズの『遺言書』こそが最悪の作であることに意見の一致をみるのではないか」遺言書に悪評をあげせたこの引用から、ニズベットが伝えたいことはすでに明らかである。さらにフェリックス・エイルマーは『お忍びのデイケンズ』のなかで、トリンガム氏なる人物を追究している。初めはスラウのエリザベス・コテッジに、続いてベツカムのウインザー・ロッジに出入

りしたらしいこの人物こそ、ディケンズ当人であったわけだが、両住居にはエレン・ターナンが住まっていた。フェリックスはディケンズの一八六七年『手帖』を入念に調査して、四月十三日のメモ“SI : at 1025. at SI : at 2 $\frac{1}{2}$ Arrival”に注目して“Arrival”はスラウに到着とも読めそうだが、頭が大文字なのでこれは別件を表わし、「誕生」と解すべきだそう。フェリックスは出生記録や住民名簿等々をつぶさに検分して、トリンガムの姓をもつ子の誕生を追跡した。ディケンズとエレンのあいだに生れた子の存在を立証しようと考えたわけだが、そのあたり、本書はまさに一探偵の捜査を髣髴させる。そうしてくだんの姓をもつフランシス・チャールズ・トリンガムが、異なる住所ながら、同年五月十日に生れていることをつきとめた。ディケンズはそちらのトリンガム氏のもとへ乳児を養子にやったという⁽²²⁾。

この『手帖』に同じく触手をのびたのがクレア・トマリンであり、たちまちベストセラーになった『秘められた女』にも、その後の『チャールズ・ディケンズ伝』にも、ディケンズとエレンの道ならぬ関係が一つの山場をつくっている。トマリンは『手帖』の“Arrival”だけなく、一週間後の四月二十日に記された“Loss”の一語にもこだわりを見せ⁽²³⁾、この語は子供が亡くなったと解すべきとすることである。もしこの解釈が真実なら、ペルギー夫人の話——男児は夭折した——という一件に符合してまことに結構なのだが、トマリンの推断はマイケル・スレイターによって脆くも打ち碎かれ

ることになる。

スレイター教授は最近発行された『書翰集』から、同年四月二十日付でバディントンの駅長宛にディケンズが手紙を書いている一事をつきとめた。手荷物の小さな鞆を置かれた (“Loss”) との申し出であったようだ⁽²⁴⁾。どうやらトマリンの筆は、ディケンズの晩年をドラマチックに彩ろうとする傾向が強いようだが、一歩まちがえば大怪我をしかねない。ディケンズの死にふれた件もしかりである。トマリンは大胆にも定説を覆そうとする。ディケンズが倒れたのは自宅ではなくペッカムの家であり、醜聞をおそれたエレン・ターナンが急遽死んだ（死にかけた）ディケンズを馬車に乗せてギヤズヒル邸へ運び込んだというのである。何を根拠に、といたくなる。いずれも限られた事実をつなぎ合わせて蓋然性の高いシナリオをこしらえようとするのだが、これはある意味で「研究」のたどる一つの道すじなのかもしれない。マイケル・スレイターはそこで一歩距離を置いて、それぞれ野心的な真実探求の足跡を一つ一つたどってみせた。『偉大なるチャールズ・ディケンズ醜聞』、この一書をもって、これまで世間を騒がせ、あまたのディケンズ研究意欲を駆り立ててきた一大テーマがきれいに整理された感がある。かつて出版された主要な書籍はもとより、新旧の新聞・雑誌にも洩れなく目を通し、ディケンズとエレン・ターナンの交わりの実相というより、実相なるものに惹かれてやまぬ諸氏の実相に近づこうとする。いわばメタ視点とでもいおうか、研究対象の泥沼に沈み込んで

いくのではなく、はるか高みに飛翔しながら全貌をとらえ、広大かつ精確な地形図を作製しようというのである。そもそも人間の種々の営みなども、歴史の波に洗われてみれば、一枚の地形図とさして変らぬではないか、といわんばかりに。

とまれ、エレン・ターナンの存在はダイケنزの生活と、ひいては彼の文学に大きな波紋を投げかけた。女をそばに置いて幸せてあったかどうか知らぬほどに、ただ何もかにも突き動かされながら、あたかも運命と格闘でもするかのように、ダイケنزは目下の情況とがっぷり四つに組合った。そうして、さんざん傷つきながらもなんとか活路を見出そうと煩悶した。折しも『オール・ザ・イヤールウンド』誌に連載を始めた『二都物語』は、その巻頭の小題に「よみがえった」(“RECALLED TO LIFE”)と掲げて、作者本人の心中テーマを象徴するものとなった。ここにはダイケنز自身の切実な願いがこめられていたはずだ。

『二都物語』の着想は、およそ二年前の八月、マンチエスターで『凍れる海』の芝居公演を行ったときに湧いたとされている。美しくも悲しい犠牲精神の発露というこの芝居を終えて、ダイケنزは、「みんなで小説を書いているような、何か不思議な感動におそわれた²⁵」という。後日、その小説をダイケنزは一人、書くことになる。

『凍れる海』における自然の猛威と人間の微力、その相互関係から生れる至純の虚構世界は、一定の社会情況における個人という視点から成立しうるだろうか。それに適う社会情況ともなれば、近

くはフランス革命時におけるあの暴力と不合理と、有無をいわさぬ政治的圧力の濫用が思い浮かぶ。ああいう混乱をきわめた殺伐な世に生きて、そのなかから何か琴線にふれるような、個人の魂の抵抗のごときを現出させることは可能だろうか。それができさえすれば、最悪の事態はむしろ最善の状態を生む母胎となり、不幸は転じて幸福となるはずである。ダイケنزとしては、目下の怒濤の日々に新しい勇氣と活力を注いでくれる強壯剤ともなろう。

ダイケنزは早くからトマス・カーライルの『フランス革命史』をくり返し耽読した。この著作に多くを負ったことは『二都物語』の序に示すとおりである。歴史は事件の連鎖によって動いてゆく。事件を小説の前面に出せば、そこに介入する人物の個性はおのずと薄れ、かわりに個を越えた一般性が読者の目に訴えてくることになる。そこに読者はアレゴリーの普遍性を読み、また象徴的意味あいを読むことにもなる。さて、フランス革命の中枢をなすものは、どれほどの美辞麗句にくるまれていようが、事実、妥協をゆるさぬ殺し合いである。『二都物語』の作中にあつては、マダム・ドファルジュの復讐への執念こそがもっとも端的に革命の本質を代表している、それからすれば、ドクトル・マネットの甘ったるい寛恕の態度などは、まるで夢まぼろしの境を浮遊しているかのように見える。もちろん、そうかといつて、作中におけるドクトル・マネットの存在価値が低落するものではない。むしろドクトルは人を憎むよりも恕すことで、過去にこだわるよりも未来を見つめることで、暗い

世に光を導き入れる人物として作中に不思議な存在感を示している。娘のルーシーとチャールズ・ダーニーを結ばせ、耀かしい次世代に思いを託すあたり、シェイクスピア作『あらし』のプロスペローに似てなくもない。ただドクトルは、ギロチンのもとへ囚人をつれてゆく役人のように歴史を体現してみせる人物ではないだけだ。さらにまた、ドクトルよりも誰よりも、未来に切実な夢を託しながら小説空間に生きているのはシドニー・カートンである。この夢みがちな酔っぱらい弁護士は、みずからの命を犠牲にして、自分と瓜二つのダーニーの軀のなかにわが生きる道を選ぶ。よみがえるのである。「我はよみがえりなり、生命なり、…」(ヨハネ・11:25)。

《よみがえり》は『二都物語』作中にさまざまな暗喩をもって表出される。幽閉の身のドクトルがルーシーの父親として現世によみがえるのも一つだし、ジェリ・クランチャーが副業とする墓あばき(resurrection)は文字通り死体をこの世にふたたび引き出す。死刑宣告から一転して救われたダーニーも、広い意味での《よみがえり》にちがいない。そしてカートンのヒロイックな最期がまた、イエスの言葉を耳もとに聞きながら、地上の生から天上の生へとよみがえる瞬間である。騒乱の日々を振りきって、別様の人生へよみがえらんとする希いは、あるいはディケンズにとって作中人物以上に強かったかもしれない。『二都物語』は、そんなディケンズの夢の色がまことに濃い作品となっている。

一八五九年十一月末に『二都物語』の連載が完了したあと、ディ

ケンズはその脚本化に精を出した⁽²⁶⁾。ディケンズの演劇志向は青少年時代にまで遡って痕跡をたどることができ、それはディケンズ文学の随所に影を落としているばかりでなく、ディケンズの実生活そのものが演劇的趣向と演劇的感性に導かれて、いわばディケンズ一流のスタイルをつくり上げていた。タヴィストックの自邸に小劇場をこしらえて素人芝居に興じたり、脚本を書いたり、公開朗読に打ち込んだり、何を試みようが、そこにはディケンズの癒しがたい演劇熱が感じられる⁽²⁷⁾。

むろんそうはいっても、話が朗読となれば、やはり演劇とはどこかで切り離されるべきである。朗読が諸方で盛んになった十九世紀半ば、演劇を毛嫌いな人びとでも朗読の催しとなると興味を示す傾向があった。シェイクスピア役者などが、しばしば舞台から演壇へと降りていったのも、世の風潮を反映させている。そんなこともあって、朗読はとかく演劇の代用とも見られがちだったが、『サタデー・レビュー』のある記事によれば、ディケンズの朗読はその例外であって、「演壇が劇場の不完全な代用とされているなかで、そうとばかりも考えられぬ一例がここにある。演壇のほうが、むしろ最適の舞台と見える⁽²⁸⁾」という。ならば、演劇と朗読の根本的なちがいは何か。また小説と、演劇あるいは朗読のちがいはどこにあるのか。

演劇人としてのディケンズは、主役をつとめ、台本に手を加え(たとえば『凍れる海』)、演出全般を指揮して芝居を盛り立てる。一方、

朗読となると、デイケンズは作中の老若男女をみな一人で演ずるのである。『クリスマス・キャロル』などでは、登場する二三人もの声をそれぞれに使い分けねばならない。声ばかりか、デイケンズは盛んに手を動かし、表情を千変万化させながら登場人物おのおのになりきったものだが、これは演劇の所作とは一つの点において決定的に異なる。すなわち、デイケンズは上半身のみを使って両足は同じ位置にとどまった。動作を極力抑制したのだ。下半身が勝手に動きださぬよう、そのためにデイケンズはあの有名な朗読機を使用していたとも考えられる⁽²⁹⁾。台本を片手に開いて持つのも、朗読だからそうするのであって、実際にはワンマン・ショーの役者よろしく、デイケンズの朗読は台本など見ているようでさして見ていないのである。

デイケンズの台本は全部で二一篇あるが、各作品に寄せるデイケンズの思いもそれぞれ異なれば、台本作成に費やした時間や労力もまちまちである。たとえば長編小説をせいぜい一、二時間の朗読台本に加工するとは、どういふことなのか。まずしかるべき作品を選んで、それから聴衆の期待を裏切らぬように削ってはつなぎ、言葉を補いながら全体を整え、時間内に収まる一篇としてまとめなければならぬ。いうまでもなく、これは原作からどこまでも遠ざかってゆく作業になる。ドラマ性を駆りたてる方向へとすすめるかわりに、デイケンズの文章のもつ独特な肌ざわりや、ひねりや、妙味が消えてしまう結果にもなる⁽³⁰⁾。しかし問題は、小説とは似て非なる

朗読に、デイケンズは初めからそれと知りながら、どこまでも深く没頭したという点にある。何がそうさせたのか。

デイケンズは慎重に事をはこぶ性格であったから、公開朗読に踏みきるのでも、その前段の試みを通して聴衆の感触なりを探った。友人ら十人を集めて自作『鐘の音』を朗読したのは一八四四年のことで、このとき『朗読の力』を実感したのが事の始まりとされる。そのころアルバート・スミスがデイケンズのクリスマス物を脚本化して舞台にのせ、デイケンズと親しく付合うようになった⁽³¹⁾。スミスは各地を冒険旅行して、その体験をワンマン・ショー仕立てに語り、たいへんな人気を博したが、デイケンズを朗読へ駆り立てるのにスミスの成功が与つて力あつたことはまちがいない。またスミスは少年のときからチャールズ・マシューズの話藝に惹かれ、それもデイケンズとの共通点に数えられる。そのスミスにデイケンズは公開朗読の一件を相談したのである。

デイケンズは一八五三年末バーミンガム公演をもつていよいよ公開朗読に踏みきつたが、このあと四年あまりは試行期間として位置づけるのが妥当かと思われる⁽³²⁾。ここでは都合十八回の慈善朗読を行つて、演目は『炉端のおろぎ』の一回を除けば、あとはみな『クリスマス・キャロル』である。その台本も段階をふんで短縮化されてゆき、聴衆の反応はすこぶる良好とはいへ、デイケンズ本人としてはなお一抹の不安と不満を覚えていたように思われる。特別に詠えた朗読機もまだ登場せず、胸から上ぐらいしか見えない不恰好な

演壇の前に立って声を励ますようなあんばいであった。ピーターバラでの慈善朗読について、こんな評がある。「赤い布をかけた背高のつぼの演壇を眺えさせて、これはまるで屋根を外したパンチ・アンド・ジュディ・シヨアの代物じゃないか。：演者の頭と肩のほか何も見えやしない」⁽³³⁾

そうして一八五八年四月末、デイケンズはプロの読み手として壇上に立つことを決心するが、これは先にも述べたように、妻キャサリンとの離別に至るほんの二週間前である。

「家庭の不幸があつて：朗読に打ち込むことで身体を疲れさせるというのが、いちばんいいのだろう」(一八五八年五月二日、コリンズ宛)。かくてデイケンズは五八年八月から十一月にかけて第一回目の地方巡業を行い、イングランド、アイルランド、スコットランドの各地でひたすら朗読に熱中した。演目も『クリスマス・キャロル』ばかりに止まらず、『ピクウィック裁判』、『ひいらぎ亭のブーツ』、『ギャンブかあさん』、『ドンビー坊や』、『哀れな旅人』など、大幅に増えた。翌五九年四月からは『二都物語』の連載、六〇年十二月からは『大いなる遺産』の連載へと続くが、さすがに小説執筆の期間は朗読活動も控え目に抑えられたものの、六一年の秋からは第二回目の朗読巡業に出かけ、翌年一月まで、またも精力的な活動となる。台本作成はさらに一歩進んで『デヴィッド・コパフィールド』や『ニコラス・ニクルビー』の長編まで加わることになるが、実はこのとき『バステューユの囚人』の台本が用意されて

いた。これは朗読されることなく終わった五作品のうちの一つだが、苦心して手を加えた跡が見えながら、デイケンズとしてはなお不満が残ったものか。⁽³⁴⁾ 原作の初めの数章だけを採用して、ルーシーのダイアローグなどもほとんど変えていない。シドニー・カートンの犠牲へとつなぐのが困難であったために断念したのだと見る論者もあるが、その説と呼応するかのようにエムリン・ウィリアムズの台本と朗読がある。⁽³⁵⁾

『バステューユの囚人』と対照的に映るのが、最後に考案された演目『サイクスとナンシー』である。ドクトル・マネットがルーシーを見つめる目は、狂ったリアがコーディーリヤを凝視する目と重なるが、サイクスとナンシー両者の視線がぶつかるころには、憎悪と殺意と恐怖が渦をなすばかりだ。ドクトルのやつれた五体をやさしく抱くルーシーがこちらにいて、あちらにはか弱い女をベッドから引きずり下ろす暴漢がいる。デイケンズは、『撲殺』と呼んで胸ときめかせたこの演目を、周囲の反対を振り切るようにして演壇にのせた。ときあたかもセンチシヨナル物に身ぶるいしつづ悦ぶ時代であつて、デイケンズとしてはこの演目を手放すわけにはいかなかった。⁽³⁶⁾ そしてそれ以上に、ここで聴衆の心をがっちりと呼え込み、おのれの力を確認しなければならぬ。これこそデイケンズの『よみがえり』でなくて何であろう。思えば妻が去り、家庭の幸福も色あせ、ジョージナとエレン・ターナント、たまに逢つて言葉を交わす子供らや友人らがいるほかに何もない人生、そんなおのれの人生

にディケンズは何を見ていたか。最後の力を駆り立ててやること
 といえば、棍棒を振りあげ、何物かに向けてひと思いに振りおろす
 ことだったのか。その点を明らかにするために、稿を改めて『サイ
 クスとナンシー』の入念な分析を試みたい。

註

- (一) Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Vol.8. Ed. Graham Storey and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon Press, 1995. Appendix F 744.
- (二) *Ibid.*, Appendix F 740-742. ディケンズの手紙 (25 May 1858) の二人の証言が付けられ (29 May 1858) 後日『ニモーノート・トリビューン』紙に掲載された (16 August 1858)。「The 'Violated Letter' (不法に公表された手紙) と呼ばれる。
- (三) Collins, Philip. Ed. *Dickens: Interviews and Recollections*. vol.1. London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1981. 131-164.
- (四) ディケンズはドストエフスキーとの面談で、自分のなかには二人の間が棲んでくることを語った。Tomalin, *Clare, Charles Dickens: A Life*. New York: The Penguin Press, 2011. 322.
- (五) Storey, Gladys. *Dickens and Daughter*. London: Frederick Muller Ltd., 1939. 134.
- (六) *Ibid.*, 94. ケイトは一貫して母に同情的であり、母の味方に立ってやれなかっただけで永く悔みを引かずいた。*Ibid.*, 219 参照。
- (七) Adrian, A. Arthur. *Georgina Hogarth and the Dickens Circle*. Oxford UP, 1957. 48.
- (八) *Ibid.*, 10.
- (九) マイケル・スレイターは、「十年以上にわたる情婦に与える金額であつたとしたら」これを「大金」と解せず。Slater, Michael. *Dickens and Woman*. London and Melbourne: J.M.Dent & Sons Ltd., 1983. 216. ニューランドの「高貴」Nisbet, Ada. *Dickens and Ellen Ternan*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1952. 21.
- (十) Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Sinclair-Stevenson, 1990. 978.
- (十一) Longley, Katherine M. "Ellen Ternan: Muse of the Readings?" *The Dickensian* (summer, 1991), 70.
- (十二) 先にこのイベントは *The Daily Express* (3 April, 1934) に "Charles Dickens began his Honeymoon" を報じた。
- (十三) Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities* (The Oxford Illustrated Dickens). Oxford, New York, Toronto, Melbourne: Oxford University Press, 1987. 18-19.
- (十四) Longley, Katherine M. "The Real Ellen Ternan", *The Dickensian* (1985), 31.
- (十五) Wright, Thomas. *The Life of Charles Dickens*. London: Herbert Jenkins Ltd., 1935. 284.
- (十六) J.W.T. レイはディケンズを擁護するあまり、ストーリーの著書や「不用の書」と唾棄している。Ley, J.W.T. "Father and Daughter", *The Dickensian* (1939), 250-253.
- (十七) *Dickens and Daughter*, 93-94.
- (十八) *Ibid.*, 134.
- (十九) Parker, David and Slater, Michael. "The Gladys Storey Papers", *The Dickensian* (1980) 4.
- (二十) *Dickens and Ellen Ternan*, 41-42. 母の誓いのせいでこのレイは Nayder, Lillian. *The Other Dickens: A Life of Catherine Hogarth*. Ithaca & London: Cornell University Press, 2011. 273-288. 参照。
- (二十一) *Ibid.*, 21.
- (二十二) Aymer, Felix. *Dickens Incognito*. London: Rupert Hart-Davis, 1959.

49-61.

- (53) Tomalin, Claire. *The Invisible Woman*. London: Viking, 1990. 173.
- (54) Slater, Michael. *The Great Charles Dickens Scandal*. New Haven and London: Yale University Press, 2012. 175.
- (55) Fielding, K.J. Charles Dickens: *A Critical Introduction*. London, New York, Toronto: Longmans, Green And Co., 1958. 155.
- (56) Fawcett, F. Dubrez. *Dickens the Dramatist*. London: W.H. Allen, 1952. 94,96. ディッケンズは脚本家トム・テイラーの相談を受け、この一作は翌年一月三〇日、ランベトウム劇場で土演された。
- (57) Jackson, G. Frederick. "Dickens as Actor". *The Dickensian* (1907). 178.
- (58) "Readings". *The Saturday Review* (4 October 1862).
- (59) Collins, Philip. "Dickens's Public Readings: The Kit and the Team". *The Dickensian* (1978). ディッケンズが用いたガス照明器具にも言及あり。この照明方法が、ディッケンズを演壇の一所にごびめる上で一役かったはずだ。
- (60) エムリン・ウーリアムスはディッケンズの朗読台本について大きな不満を窺うことができた。Williams, Emyrn. "Dickens and the Theatre". Ed. EMF Tomlin. *Charles Dickens 1812-1870* (A Centenary Volume). London: George Weidenfeld and Nicolson, 1969. 190-194.
- (61) Fitzsimons, Raymond. *The Baron of Piccadilly*. London: Geoffrey Bles, 1967. 46. アルバートの弟マーサー・スミスが後年、ディッケンズの公開朗読レネージュヤーを務めた。
- (62) Gordon, D. John. *Reading for Profit: The Other Career of Charles Dickens*. (An Exhibition from the Berg Collection) New York: The New York Public Library, 1958.
- (63) "Dickens's Public Readings: The Kit and the Team". 9.
- (64) Slater, Michael. "The Bastille Prisoner: a Reading Dickens Never Gave". *Etudes Anglaises*, xxxiii (1970) 190-196.
- (65) Williams, Emyrn. *Readings From Dickens*. Melbourne, London, Toronto:

William Heinemann Ltd, 1954.

- (66) Collins, Philip. "Sikes and Nancy' Dickens's last reading". *TLJS*. (11 June, 1971). エイト・トニム・シーク "The Dream of Eugene Aram, the Murderer" の「折時脚光を浴びた」。

* 本稿は2013年度特定課題研究助成費特定課題 A (2013A-6071) の助成による。